

授業評価結果に対する
教員のフィードバックに関する調査結果

東京工業大学 大学院 社会理工学研究科

平成20年度 後学期

平成21年7月

大学院 社会理工学研究科 評価委員会

1. 目的

平成20年度後学期授業に対する学生による授業評価のアンケート結果をもとに、教員が自分の授業をどのように自己点検し、授業の改善を図るかを検討することにより、今後の教育評価や改善方策の策定に役立てる。

2. 調査対象，調査方法

平成20年度後学期授業の評価に協力してもらった授業38科目に対して、担当教員に科目別の評価結果及び全体の傾向を知らせた際、その評価結果を見て、今後どのように授業改善を行うかを尋ねた。

調査の実施，集計，分析については，教育工学開発センターの協力を得た。調査票の配布，回収などの事務作業については大学院社会理工学研究科事務係にお世話いただいた。

3. 調査時期

調査期間は平成21年5月15日から平成21年6月8日までである。

4. 調査項目

学生アンケートの実施状況，調査結果に対する予想と評価結果の乖離，今後の授業に対する工夫，について質問を行った。

5. 調査分析結果

5.1 回答数

回答科目数は14で回答科目率は36.8%である。回答者の所属専攻別の回答数を表1に示す。

表1 回答数

専攻区分	回答科目数	調査対象科目数	回答科目率(%)
人間行動システム	6	13	46.2
価値システム	2	8	25.0
経営工学	3	8	37.5
社会工学	3	9	33.3
合計	14	38	36.8

注) ここでの調査対象科目数は，授業評価アンケートの回収があった科目数であり，教員のフィードバック調査を依頼した科目数である。

5.2 調査結果への予想

調査結果の予想と実際との違いについて、以下の質問を行った。

質問1. 別紙アンケート項目(1~16, a~C)についてお伺いします。結果は予想された範囲内でしたか、それとも予想外だったでしょうか。

(1) 自分が予想した範囲より評価が高かった項目(複数回答可)の番号を記入して下さい。

(2) 自分が予想した範囲より評価が低かった項目(複数回答可)の番号を記入して下さい。

学生による授業評価が教員の予想より高かった項目、予想より低かった項目を下記の表2及び図1に示す。尚、選んだ項目は複数回答であるため、回答数の割合で示してある。

表2 学生の授業評価と教員の予想

評価項目	予想より高い		予想より低い	
	頻度	割合(%)	頻度	割合(%)
10. この授業は有意義だった。	2	28.6	0	0.0
2. 毎回の授業で、適切な要約、ポイントの指摘等が示されていた。	1	14.3	0	0.0
11. 受講前よりもこの授業内容への興味が深まった。	1	14.3	0	0.0
12. 授業の水準や範囲は、大学院の講義として適切であった。	1	14.3	0	0.0
8. 板書、OHP、パワーポイント等の視聴覚教材は見やすかった。	1	14.3	1	9.1
9. この授業科目に対する教員の熱意が感じられた。	1	14.3	2	18.2
1. この授業は授業細目(シラバス)の内容を十分カバーしていた。	0	0.0	0	0.0
3. 教員は学生からの反応や意見を生かした授業をしていた。	0	0.0	0	0.0
6. 教員の説明は明快だった。	0	0.0	0	0.0
7. 教員の声は聞き取りやすかった。	0	0.0	0	0.0
14. 教室の設備・大きさは授業の内容に適していた。	0	0.0	0	0.0
15. 教員は、授業内容と現実社会のつながりを十分に説明していた。	0	0.0	0	0.0
16. 教員は授業の準備をきちんとしていた。	0	0.0	0	0.0
c. 授業の無遅刻出席率(無遅刻で出席した授業日・時間の割合%)を選択して下さい。	0	0.0	0	0.0
d. 自分の受講態度を自己採点すると何点ですか?(100点満点)	0	0.0	0	0.0
A. 授業の内容の理解度はどの程度ですか?(100点満点)	0	0.0	0	0.0
B. あなたがこの授業で達成しようとしていた学習目標はどの程度達成されましたか?(100点満点)	0	0.0	0	0.0
C. あなたは、総合的にみて、この授業にどの程度満足しましたか?(100点満点)	0	0.0	0	0.0
4. 教員は学生のレベルや理解度をよく把握して授業していた。	0	0.0	1	9.1
5. 教員は学生の勉強意欲がわくような工夫をしていた。	0	0.0	1	9.1
13. 授業に積極的に参加する機会(質疑、討論、実習など)が十分であった。	0	0.0	1	9.1
b. この授業科目に関し、教室外での勉強(予習・復習・宿題・関連学習等)を十分行った。	0	0.0	2	18.2
a. この授業を選択するに際して、授業細目(シラバス)をよく読んだ。	0	0.0	3	27.3
合計	7	100.0	11	100.0

(注:割合(%)は四捨五入によって小数第1位まで表示している)



5.3 教員が行った授業の工夫

教員が平成20年度後学期の授業でどのような工夫をしたかについて、以下のように尋ねた。なお、この質問への回答者数は11人である。

質問2a. 平成19年度の授業と比較して、平成20年度の授業では以下のことを意識的になさいましたか？ それぞれの項目について、該当する番号に○印をつけて下さい。

1. 意識しなかった。 2. いくらか意識した。 3. 大いに意識した。

教員が行った授業の工夫について図2に示す。また、その頻度分布を次の頁に示す（図3）。

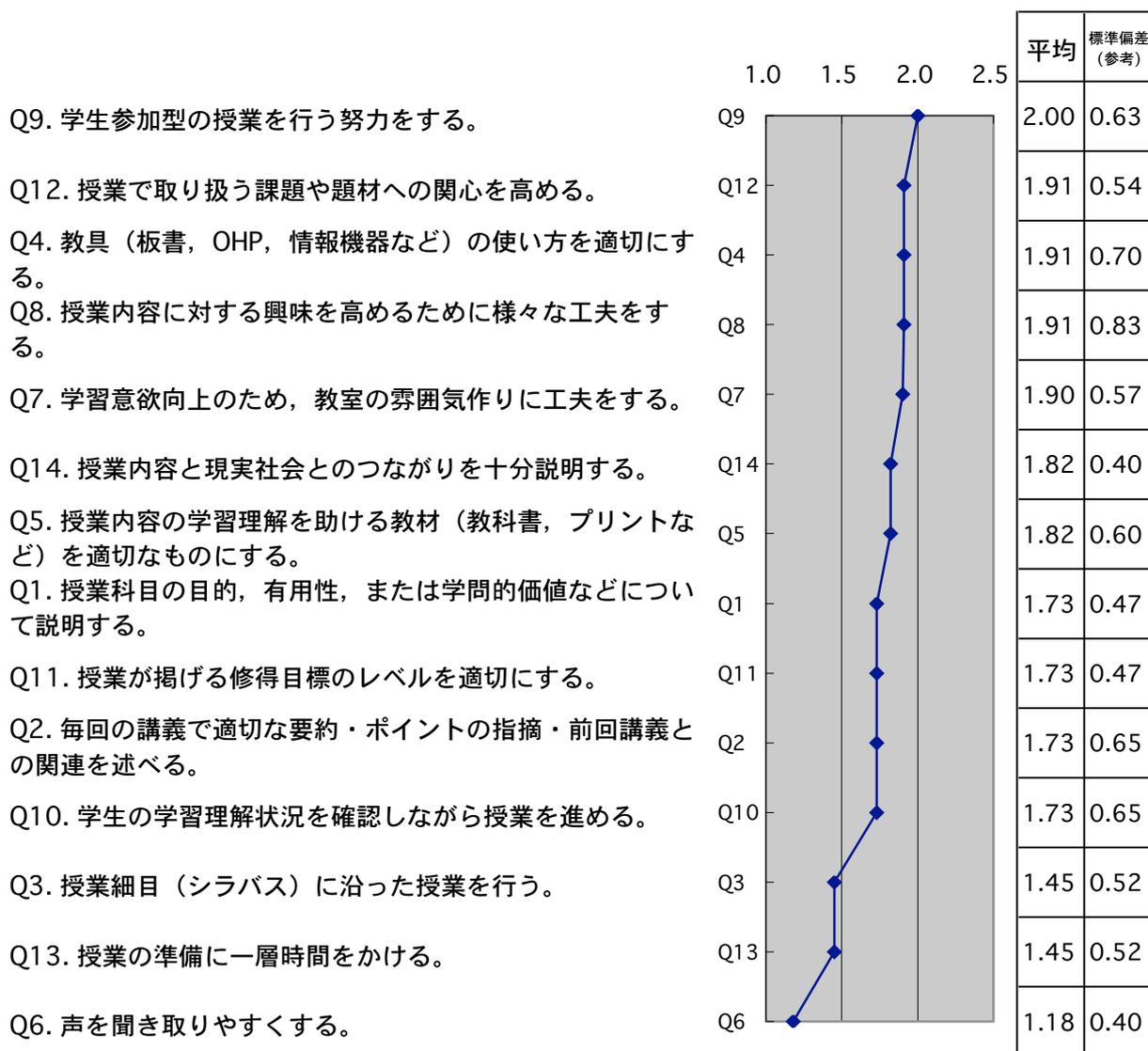
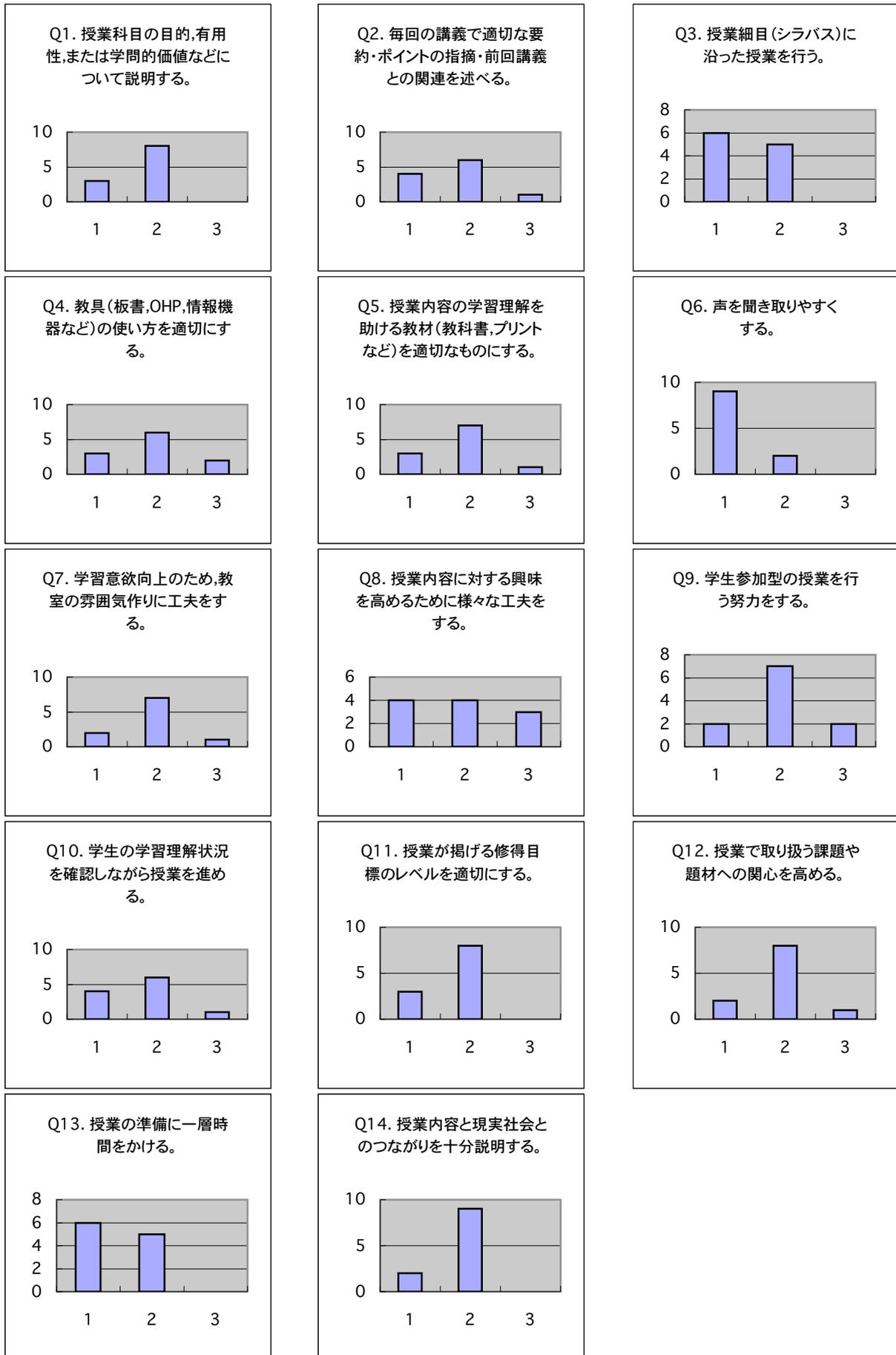


図2 教員が行った授業の工夫

図3 教員が行った授業の工夫（頻度分布）



5.4 教員の今後の授業の工夫

評価結果を見て、今後の授業をどのように工夫するかについて、以下のように尋ねた。尚、この質問への回答者数は11人である。

質問2b. 本評価結果をご覧になって、「今後の授業においてどのような工夫を検討されるか」をお伺い致します。それぞれの項目について、該当する番号に○印をつけて下さい。

1. 現状でよい。 2. いくらか工夫する。 3. 大いに工夫する。

教員が検討している授業の工夫について図4に示す。また、その頻度分布を次の頁に示す（図5）。

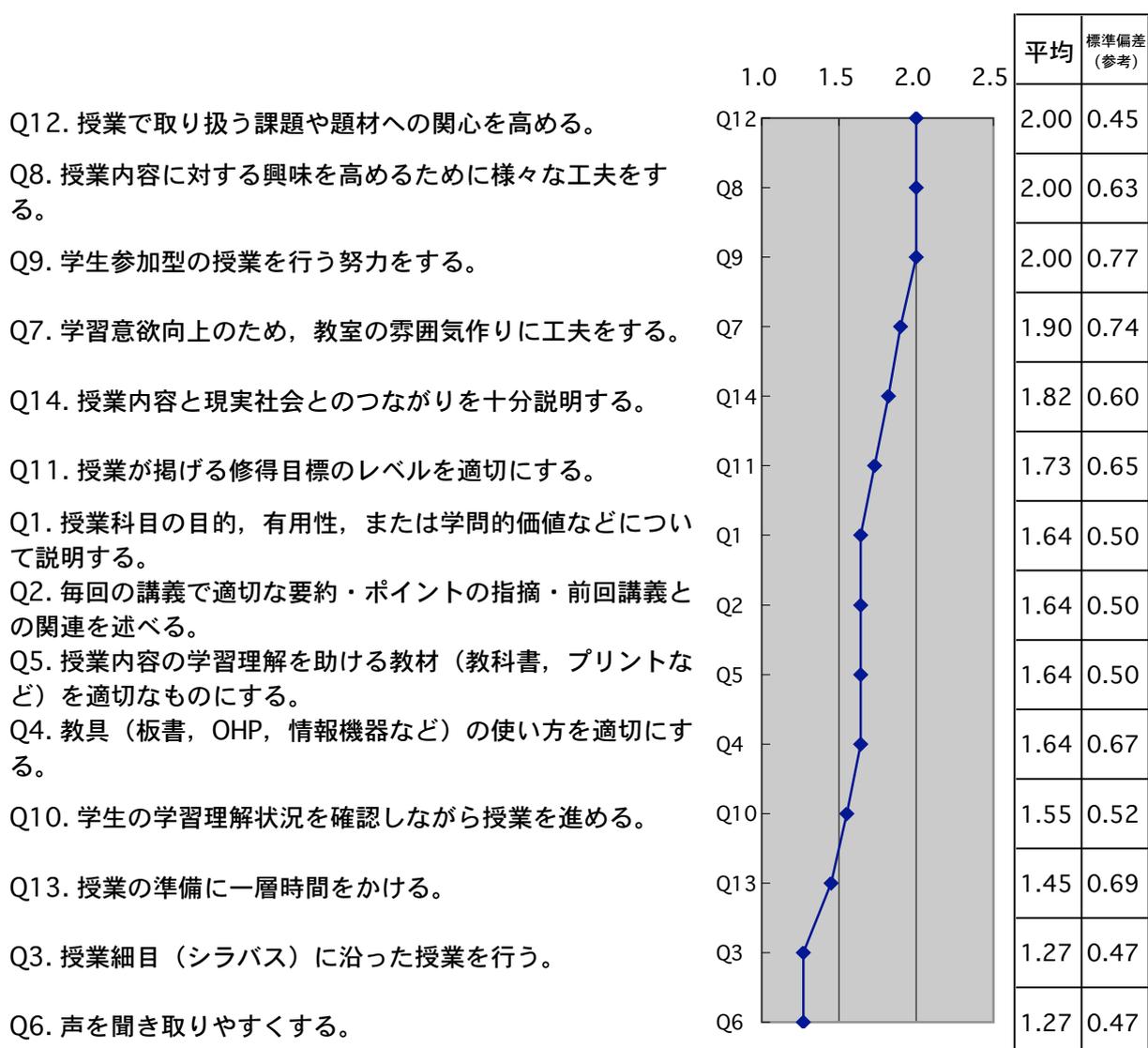
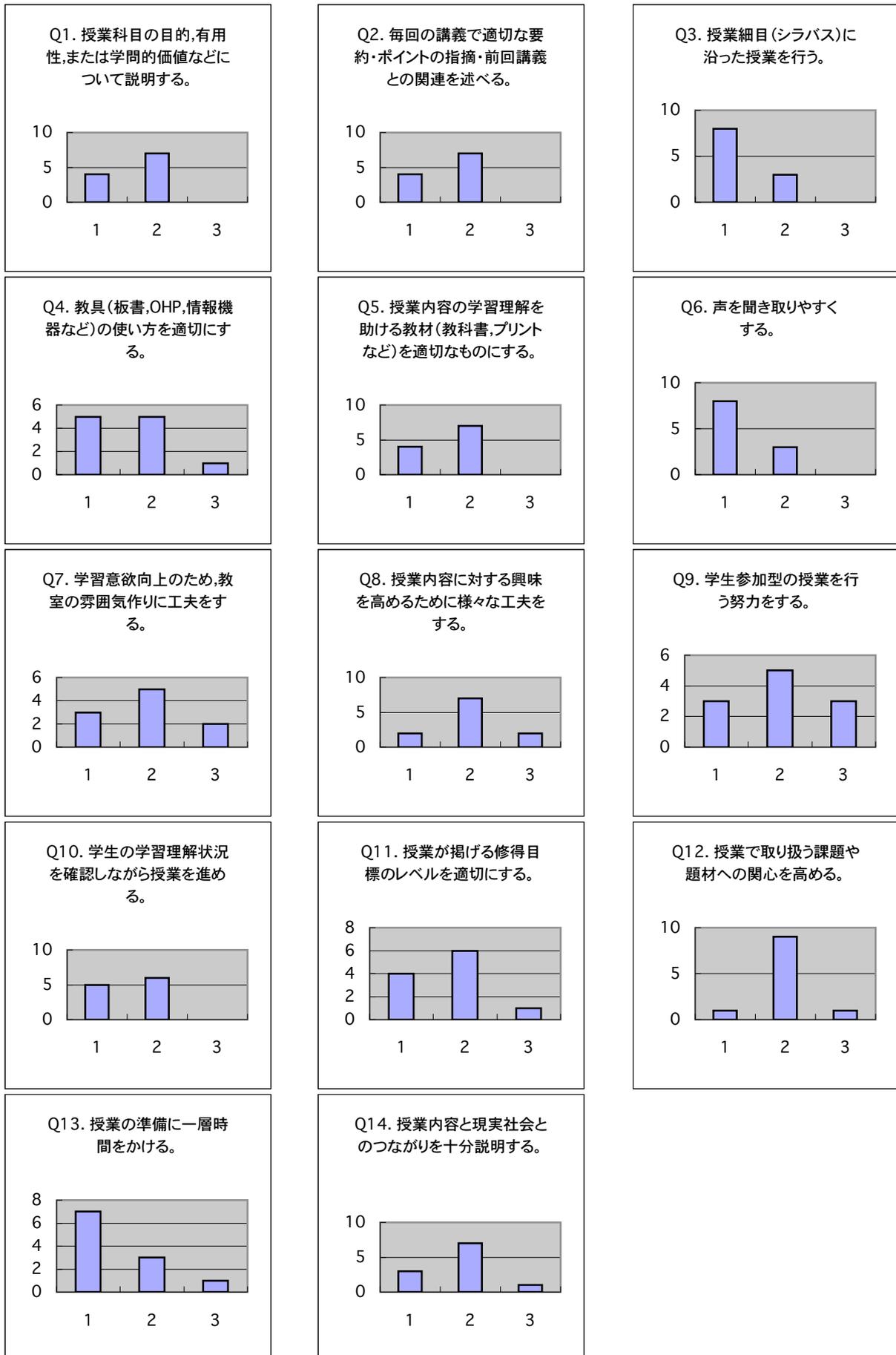


図4 今後の授業の工夫

図5 今後の授業の工夫（頻度分布）



5.5 授業評価の有効性について

授業評価結果を各教員にフィードバックしたり、評価報告書を作成したりする授業改善のための活動がどの程度役に立っているかを尋ねた。この質問への回答者数は11人である。

問題3. 以下それぞれの項目について、該当する番号に○印をつけて下さい。

1. 全くそう思わない。 2. あまりそう思わない。 3. いくらかそう思う。
4. かなりそう思う。 5. 非常にそう思う。

各質問項目に対する5段階評価の回答の平均値を図6に、頻度分布の割合(%)を図7に示す。

Q1. 授業評価結果はだいたい予想通りだった。

Q2. 授業評価結果は役に立った。

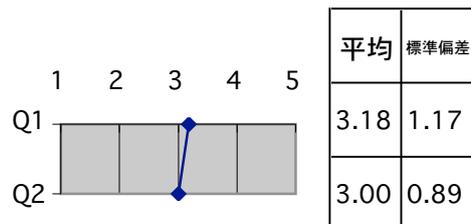
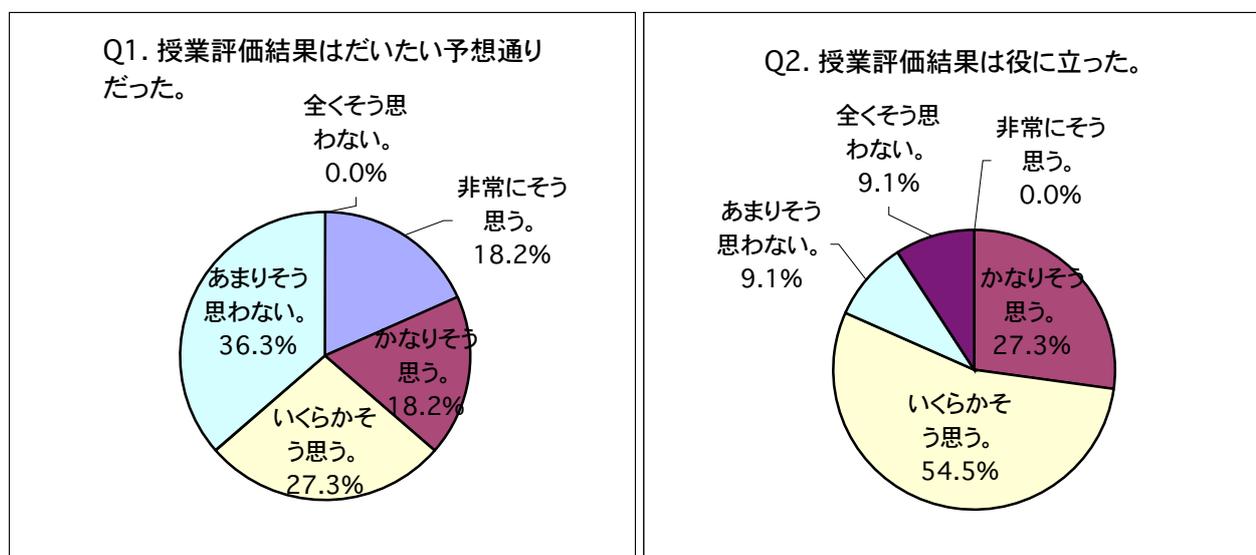


図6

図7 授業評価の有効性



「Q1. 授業評価結果はだいたい予想通りだった。」の質問に対して、「非常に予想通りだった」と答えた教員は回答者の18.2%、「かなり予想通りだった」は18.2%、「幾らか予想通り」は27.3%である。「あまり予想通りでなかった」は36.3%、「全く予想外だった」は0.0%である。「予想通り」の方に答えた教員は、回答者の約63.7%、「予想外」の方は約36.3%である。

「Q2. 授業評価結果は役に立った。」の質問に対して、「かなり役に立った」と答えた教員は、回答者の27.3%、「幾らか役に立った」は54.5%、「あまり役立たなかった」は9.1%、「全く役立たなかった」は9.1%である。この結果より、フィードバックに回答した教員の約81.8%が授業評価が役に立ったと答えている。

以上の結果より、フィードバック調査に回答した教員の約63.7%がだいたい予想通りの評価結果を得ており、約81.8%が「授業評価結果は役に立った」と回答している。

さらに、「授業評価は役立った」と答えた教員に対して、評価が予想範囲内であったかどうかについて、また、「授業評価は役立たなかった」と答えた教員に対して、評価が予想範囲内であったかどうかについて、表にまとめて表示した（回答者数11人）。

	評価は予想範囲内	評価は予想範囲外	横計
授業評価は役立った	5	4	9
授業評価は役立たなかった	2	0	2
縦計	7	4	11

以上より、「評価は予想範囲内だった」と回答した教員の約71%は「授業評価は役立った」と回答している。また、「評価は予想範囲外だった」と回答した教員は、全員「授業評価が役立った」と回答していることがわかる。

6. 教員自由記述

これはアンケート調査での自由回答欄に記入された意見を分類し、まとめた（回答数8）。教員から貴重な意見が寄せられたが、多様な意見を取捨選択することなく、できるだけ元のままで記載するように努めた。但し、分類上、一つの文章を幾つかに分ける場合もある。ほとんど同じ内容のものは文末の（ ）内に類似回答数を示し、重複をさける。

- ・特にスポーツ選手の適性とメンタルトレーニングの内容について講義したが、「スーパーエリートを分析する」というテーマで各自がモデルを決めて、発表する場を設けた。また、性格検査や心理的競技能力尺度、ピークパフォーマンスのクラスター分析など作業を多く取り入れて、自分自身のマネジメントを目指したが、さらに一層の工夫が必要であることを痛感した。

- ・運動機能の解剖は工学系の院生には馴染みが薄いのでDVDやpowerpointで視覚に訴える方法をとっているのですが、やはり方向性になるのが欠点かと思います。身体全体を万遍なく教えるのではなく大学院の授業ですから、院生の興味のある部分絞ってマクロからミクロまで話すのも一つの方法かと考えております。現在の医工学のニーズに合わせて、ターゲットを絞った授業を最終日に盛り込むことを考えてゆきたいと思います。

- ・演習系の授業と講義系の授業が同じ土俵上で比較されない様にした方がよいと思う。例えば、全体の平均値の算出は、演習系と講義系で分けてもよいと思う（違いがあるかわかりませんが）。

- ・今回の結果では、各項目において1名の評価値が他の11名の評価値に比べて著しく低くなっている。この1名の値により平均値が低くなっている項目もあるので、人数が比較的少ない授業の場合は、最高と最低の1名ずつを除いた平均を出すなどの工夫をお願いしたい。

- ・今回特に悪かったQ13に重点を置いて、今年度の授業を工夫する。

- ・授業は少人数ゼミ形式で行ない輪読としましたので、今回の結果はまことに正常の範囲内と思います。

- ・全体として、学生の満足度は高いように感じられるが、やや評価の低い項目（1,12,16）については、改善したい。講義全体の明解なコンセプトを、シラバス等で示すよう努めたい。

- ・平成20年度後学期から、IM研究科の指定科目になり、受講者数が大幅増になりました。受講生は経営工学専攻、他専攻と社会人学生の3つのレベルに分かれ、講義内容の調整が難しいです。